

内定童貞

中川淳一郎

内定者はみんな、
正直者だった。

さまよう**就活生**のための**バイブル**誕生

年に4回、こんな夢を見る。

夢の舞台となる時期はいつも同じで、就職活動が
終わった直後である大学4年生の6月下旬。大学の
校舎の中を焦りながら歩いており、教室を覗いてみ
ては、「ここも違うか……」と嘆息する夢だ。

一体どこの大学なのかも分からない。毎回校舎は違うし、教室も登場人物も異なる。状況としては、「11コマを4年生の夏学期には受講しているものの、1コマしかまともに出席していない。出席点がそろそろ全講義で危ういので、その他の10コマは期末試験だけでもなんとか受け、『C』ぐらいを取っておこうと焦る」といったものだ。

夢なので、色々と状況はおかしい。教務課に聞けば、自分が何を受講しており、時間割も教室も教員の名前もすぐに分かる。だが、夢の中の自分はそれを知る術がない。

結局、毎日大学に通うもお目当ての講義に出席することはできず、「これで留年か……。内定も取り消されてしまう……。」と絶望的な気持ちになるところで目が醒める。そこで、冷静に現状を分析する。

当時住んでいた実家の布団で寝ていないことをまずは把握し、2013年に引っ越した家の和室の布団で寝ていることを確認する。「今は2015年、オレはもう大学生ではない。そうだよな。ああ、そうだよな」と心の中でつぶやき、現在の自分が41歳になっており、「オレは確か卒業証書を貰ったし、博報堂で4年間働いた後、ライターになった。すでに社会人になっているから、さっきのは間違いなく夢である。オレは卒業している。単位は全部取れたああよかった……」と安堵

のため息を毎度つく。

こんな夢を1997年の大学卒業以来、毎年必ず4回見るのだった。ここまで絶望的な気持ちになるのは、留年した場合、**もう一度就職活動をしなくてはいらないからである。**

あれから18年経った今でも就職活動の時の辛過ぎる体験は、私の心の奥底に^{おり}澱のように溜まり、心を^{むしば}蝕み続けているのだ――。

内定童貞

中川淳一郎

星海社

61



SEIKAISHA
SHINSHO

目次

はじめに 15

ウソだらけがまかり通る異常な期間、それが就職活動 15

筆者がなんの遠慮もなく、就活の実態を書ける理由 20

合理的にやれば、就活など怖くない 22

命あつてこそその就職。死ぬな 24

「就活」という悪夢を分解する

第1章

世の中就職できた人だらけ 30

自己PR・志望動機の「正解」に騙されるな！ 34

企業の「求める人物像」を真に受けてはいけない 37

内定を取る学生の5パターン 41

企業理念から考えるから、周りと同じことしか書けなくなる 44

学生の話は、「一体感醸成系」「激変系」だらけ 47

仕事内容を勝手に想像し、決めつけてしまう学生達 49

面接は「気持ちよく会話が出来るか」、これに尽きる 53

自分の土俵で、面接官の知らない話をする 57

博報堂に通ったプロレスの話、その全記録 60

おすすめ面接ネタ10選 67

すべては適性。優秀なやつだけが通るわけではない 69

現代就活あるある座談会 72

若手社員の言うことを真に受けない 78

相性と能力を分けて考えると、落ちてもそんなにへこまない 81

志望業界には「いずれ行ければOK」ぐらいに考える 83

フリーに転向し、やりたい仕事を取りに行く 86

「急がば回れ」は就活にも言える 92

インターン好きの友達をおだてて情報収集 96

社会人と酒を飲み、生の情報を集める 98

OB訪問は採用に直結していない 101

面接官は神でも巨悪でもない、

ただの人間である 105

学歴のないやつが狙うべきはB to Bの優良企業 106

勝ち組コロシアムと化す同窓会 110

一橋を出ても、書類が通ったのは3社だけだった 112

とんちで挑んだ、マッキンゼーの面接 115

「オレはコンサルに向いてない」と気付かせてくれたプライスウォーター 117

「面接官にもバカはいる」と教えてくれた日本テレビ 118

評価「C」からじまった博報堂の選考 123

通過した瞬間から、面接官は味方になる 126

人事は「圧倒すべき敵」ではない 134

イカ臭い和室での号泣、いちごジュース 136

面接に必要な、5つの「答え」 140

自己分析などしなくていい 142

内定が内定を生む 149

早めに内定童貞を捨てろ！ 155

美辞麗句の裏にある、

企業の本音を知れ！ 157

採用ページに「夢・感動」が躍る会社は要注意 158

人事は、リクルーターに何を指示しているか 162

就活突破のエッセンスは、すべて「鶴田君」に詰まっている 164

面接は合コンである 174

スケールの大きい話は要らない。本当に要らない 178

バカでも内定が取れてしまうのが就活 180

通った理由など、誰にも分からない 186

電通と博報堂の決定的差異 187

広告志望の学生がはまった地獄 193

社会人に「○○に向いている」と言われたらとりあえず受ける 197

元リクルート人事が語る面接官の本音 200

業界に片足を突っ込んだ学生のウザさ 205

質問に答えること、面接官を敵視しないこと 206

「仕事＝神聖なるもの」という

誤った認識

211

社会人は楽しい 212

仕事は基本、くだらない 215

「どちらの中川様ですか？」という暴力 218

中間業者が無駄すぎる 222

私の指導社員が打ち合わせを16時に入れていた理由 226

仕事を頼みづらい『情熱大陸』出演者たち 230

第一志望に入れずとも、いくらでも幸せになれる 233

幸せは、「環境」がもたらすものではない 236

「夢」を「目標」レベルまで落とす 239

仕事をしていると、自然と余裕が出てくる 244

夢は突然叶う 247

はじめに

ウソだらけがまかり通る異常な期間、それが就職活動

初っぱなからインチキ文学のようなことを書いたが、就職活動は実際辛かったし、もう二度と経験したくない。

そして、今、つくづくこう思う——社会人に無事なれて本当に良かった、と。現在私はフリーランスを経て、自分の会社を経営してはいる。今後、経営に行き詰まり、仮にどこかの会社の中途採用面接を受けるのであれば、それほど気負いはない。多分どこに通るだろうとは思っている。だが、新卒時の就職活動の際は、正直どこに通る気もしなかった。

冒頭の単位が取れない悪夢についても、その先にある「留年」が「再度の就職活動」とセットになっているが故に、悪夢たりえ、何かの教訓を暗示しているかのように何度も何度も見せられるのである。今回、書籍を書くにあたり、就職活動を終えた複数の学生に話

を聞いた。無事内定を取れた方々ばかりだったため、一様にスッキリとした顔はしていたものの、活動中の迷走・もがきっぷりは想像できた。

私が過去に採用担当者として出会った学生達も、本当に苦しみ抜いていた。そして、内定のない状態Ⅱ内定童貞を卒業した後の晴れやかな表情、仕事を開始した後の自然体な雰囲気とは大きなギャップがあった。もちろん良い意味で、だ。

人生において、ウソだらけがまかり通る異常な数ヶ月——これが大卒見込み者における就職活動というものである。普段、人間として生活している以上、あくまでも自分本位に行動を続けるものだが、なぜか就活中、学生も企業も実に他己本位というか、自己犠牲の精神に溢あふれているというか、「いい人」に変貌する。これはいったいなんなのだろうか。

誠にくだららない。

私は彼らにこう言いたい。

この嘘つきどもめ。

学生の側の本音を代弁すれば、こうなるはずである。

「どうでもいいからさっさと一流企業のお前ら、オレ様に内定出せ。そうすれば、オレ様はそれなりのステイタスと力ネを獲得できる人生になるんだ

よ。もう就活うぜえよ。早く遊びてえんだよ」

そして面接を行う人事担当者の本音はこれだ。

「はあ、またバカが来たか……。もうさあ、国立、早慶と難関私大の学生、そしてそれら以外の大学でトップクラスに入るまともなヤツだけウチを受けてくれよ。頼むよ、本当に。何人東大から取ったかが重要指標の一つだっていうのに、バカばかりウケやがって。お前らに使ってる時間、ムダなんで」

こうした学校差別をする企業も時にある。そして多くの企業の本音はこれだ。

「つーか、ウチが欲しいのは、稼げるヤツ。これが絶対！！！！！！！！！！」

そして、

ガタガタ言わずに働くヤツだ。別にお前がサークルで代表をやっていた話な

んでどーでもいいの！ 同じような話
するヤツばかりでもう飽きたよ！ 今
はそんなにしおらしいこと言ってるけ
ど、いちいちお前ら、『残業10分しまし
た！ 残業10分であつてもつけるのが
コンプライアンス上重要ではないでし
ょうか！』みたいなこと言うんだろ？

面倒くさいこと、言わないでくれよ、頼むから。そんなウザくてケチくさいヤツいらんので」

だが、基本的に就職活動においては、企業も学生も建前合戦ばかりやっている。学生の側はこうだ。

「私は、これまでの人生において、周囲の笑顔、組織全体の円滑な運営について、腐心してきました。スタンドプレーに走り、学園祭の時に焼きそばを過発注するという失敗もしました。落ち込み、自分が1000人分を引き取ると皆には伝えましたが、その時、仲間の『お前が全部一人で背負う必要はないんだよ。みんなで頑張って焼きそばを売って売って売りまくるだけだよ!』という一言にハツとし、チームワークの重要性に気付きました。焼きそばの味を他の屋台よりもおいしくすることにその後は注力し、結果完売しました。その経験を御社の『チームを組んで一つのプロジェクトを推進する』というミッションに活

かせれば、と思います」

企業の側はこうだ。

「当社が求める人材は、個々の役割を理解したうえで、いかに社会、そしてお客様に役立つサービスを自立したプロフェッショナルとして提供に専心できる人物です。一人一人が違ってもいい。多様な人材を採るべく、今回の採用活動ではこちらも本気で臨みます。意欲のある皆さんの応募をお待ちしています。企業というものはやはり最後は『人』にいきつきます。そんな素晴らしき『人』と仲間になるための採用活動を当社は行います」

筆者がなんの遠慮もなく、就活の実態を書ける理由

私は就職活動については完全なる門外漢であり、業界にかかわる人間からすれば「なんでお前が書いているんだよ？」と思うかもしれない。だが、業界にいる方々からすると、業界のしがらみがあつて本当のことを書けない部分はあるのである。文章を書いていたら、いちいち知り合いであるA社の人事部長の顔が浮かんで「あああああ、これは書けないいいいいい。ええい、全削除！ パーン！（delete キーを勢いよく押す音）」とか、「うさんくさい人事関連のコンサルタントもいるので、いちいち真に受けられないようにするべきであ

る。たとえば、人事コンサルタントとして様々なセミナーを行い、多数の著書を持つX氏によると……」なんて書いたところで「あああああ、X氏とか仮名にしてるけど、読む人が読めば誰だか分かってしまうううう！ ええい、全削除！ パーン！」となるのである。

しかし、私は別に就職活動業界や転職活動業界に一切のしがらみがない。だから、建前を排除できるのである。どうせ就職活動に関連した本の執筆は一生でこの本一冊になるだろうから、いくらでも「焼き畑農業」ができるのだ。同様に、本業であるIT系や広告系については、しがらみがあるため、書けないことも多少ある。それは、色々な人々の顔が思い浮かび、その人の人生のことも考えるからだ（これが「大人の事情」ってヤツである）。

もしかしたら、就活業界の方々に、「お前は最先端の現場を分かっている」と言われるかもしれないが、それなりに本は読み、取材はしたので、最低限のことは分かっている。あと、現場の状況や制度に関する書籍は他に多数あるのでそちらにお任せする。

本書では、学生が本当に知りたいであろう「面接の本質」「社会人として生きる術」「内定を取るまでの建前排除の手順」「企業・面接官が考えていること」「失敗しがちな学生が陥るワナと成功する学生の飄々とした様子」「失敗した場合の心構え」「人生は案外うまく

いく」ということについてを、これまでなんとか社会で生き残ってきた経験をもとに書く。内定を取るコツは、門外漢ながらも案外書けたのではないだろうか。

今回、星海社の編集者から「就活について書きませんか？」と話が来た時、正直「なんでもオレが？」と聞いてしまった。すると、彼は「中川さんは身も蓋もない人間の営みについて正しいことを書けるからです。就活も人間のドロドロとした営みだし、うまくやるには、人間が何を考えているか、行動原理がなんであるかを理解することが大事じゃないですか」と言った。つまり、「人間」をいかに理解するかが内定獲得に繋がるのである。

合理的にやれば、就活など怖くない

私自身、「人間」についてはこれまで散々書籍で書いてきたし、様々なものに噛みついてきた経緯がある。ある時はネットについてどうしようもない実態を描き、ある時は人間のドス黒さを書いてきた。きれいごとだけでは世間は回っていないし、無駄に期待をさせてもその期待は裏切られることだけであることを述べてきた。

故に本書は「就活」を題材とした「人間理解」のための書だと考えていただきたい。また、「まともな会話のやり方（面接での適切な受け答え）」を具体例とともに解説する書でも

ある。

人間は実に素直な動物である。とある状況では大抵の場合は合理的な判断をするものだ。定食屋で「ご飯大盛り無料」とあれば、若者なら当然無料の大盛りを選択するだろう。これ以上酒を飲むと吐くことが分かっていたら、もうそれ以上は飲まないだろう。とある女性を好きになっても彼女に恋人がいたら、手を引いて別の相手を見つける方が合理的だろう。我々は日々、こうしたまともな判断をするのに、こと就職活動になるとそのまともな判断が突然鈍る。

内定というゴールとは関係のない非合理的な判断のもと、偏見と思い込みを元的に外れ過ぎる準備をしたり、面接でトンチンカンな受け答えをしたりしてしまうのである。そこにかかわる主体いずれもが、腹の探り合いをしているが故に、非合理的な展開が繰り広げられている哀しい活動——これこそが就職活動なのである。私が本書で述べたいのは、建前をすべて排除し、こうした非合理的な活動はみんな揃って辞めちまえ！ お前ら全員が合理的な判断をすれば、余計な苦しみなどなくなるよ！ ということである。

バイトの面接では、学生であってもまともな判断ができるものである。「平日は毎日来ていただきたいのですが……」「水曜日と木曜日は必修科目があるので無理です」「なんでウ

チの店なんですか?」「大学から近く、よく前を通っていて、スタッフの人にも楽しそうに働いていたので。あとは、『2時間』とあったので、講義の合間とかでも働けるな、と思ったので」——こういったものすごく合理的な受け答えができる。

だが、就活になると一生のことだと思いきや縮するの、聖人君子的な自分を演出しないと通らないと思うのか、非合理的かつ他の者も言いそうで、しかもトンチンカンなことを言ってしまう。「そりゃ重みが違うよ……」と思われるだろうが、私が言っているのは「程度」の問題である。バイトの面接ではビシッと条件を言えるにもかかわらず、就活になると、途端に条件を言うことが憚られ、とにかく会社に媚びなくてはいけないと考える。しかし、もう少しゴーマンかつ利己的になってもいいのではないだろうか。本書ではそのさじ加減も含め、記述していく。

命あつてこそその就職。死ぬな

2009年には、『ウェブはバカと暇人のもの 現場からのネット敗北宣言』（光文社新書）で、「インターネットを使うと集合知で世界が素晴らしくなる!」という論に対し、「バカがネットを使おうがバカのまま」と言い切った。現在の「バカッター騒動」なども含め、

インターネットがバカによるバカ行為を増幅させ、炎上を誘発するものであることは明白であろう。あれから6年、明確な反論は一切なく、2000年代中頃までの「ネットが集合知をもたらし、人間を一つ上段階に進化させる」といった論は完全に破綻。今やネットゲームで暇つぶしをし、課金で無駄なカネを使う人々だらけになり、LINEで過度なコミュニケーションを強いられる状態になっている。

また、2014年に書いた星海社の『夢、死ね！ 若者を殺す「自己実現」という嘘』でも、巷に溢れるキラキラとした「お客様への感謝が原動力」や「社会を変える人材になることが生まれてきた使命」みたいな前向き過ぎる仕事論を一蹴し、「仕事をする理由はお金のため。そして、お金をもらうためには他人から怒られてはいけない」という身も蓋もなさ過ぎる現実を書いた。本書でも就職活動に対する合理的な考え方を提示していこう。こうした合理的な考え方をすることにより、様々な悲劇は回避できるのである。

2015年1月、産経新聞のインターネット版にこんなタイトルの記事が出た。

「あー、いつまで就活するんや、俺」自殺の1週間前ブログで苦悩を吐露…救えなかった自分を責める家族

タイトル通り、関西学院大学の男子学生が、なかなか内定が出ないことに苦悩した後、家具会社に内定するも持病の腰痛が悪化。重い家具を持つことに不安を抱き内定を辞退。その後も就職活動をしたが内定は獲得できず、結局自宅の居間で首つり自殺をしてしまったというものだ。記事の最後には、父親のこんなコメントが紹介されている。

私も息子も、就職するなら正社員でなければならぬと思い詰めたことが落とし穴だった。親が子に多様な生き方を提示するとともに、異変を感じた場合はいったん就活を休ませることも必要だ

まさにこの父親のコメント通りなのである。もう取り返しがつかないが、**命の大切さに比べて、就職ごときはたいしたことではない。**生きていないと仕事もできないのである。命あってこそその就職だ。

ここで、「合理的判断」の話を再びする。就職人気ランキングの上位に入るような企業の採用枠はほとんどない。だから、その会社の内定を取れる可能性は極めて低い。だったら、

ランキング上位にはないものの、「それなりに良い会社」に入る道を探ってはいかがか。そもそも、世の中のほとんどの労働者は就職人気ランキング上位の会社で働いていないではないか。

第一、そんな会社に入ったとしても、転職する人だらけではないか。現に私を見よ！「2015年卒マイナビ大学生就職企業人気ランキング」の文系総合ランキングで堂々の6位に入った広告業界ナンバーツー企業・博報堂をたつた4年で辞めているのである！周囲の人からは「もったいない」「な……、なんで？」なんて言われたものの、自分の人生は自分で決める。「人気企業ランキング」の上位だからって、そんなものは自分の人生においてはちょっとした自尊心を満たしてくれる程度で、それ以上の大した意味はない。まあ、人生なんてそんなものである。

別に希望していた会社に入れなかったからといって、人生終わったワケでもない。その後いくらでもチャンスは転がっている。

というわけで、皆様の就職活動が苦難に満ちたものにならないことを祈りつつ、本文に突入しよう。

第 1 章

「就活」という
悪夢を
分解する

世の中就職できた人だらけ

まず、就職活動をするにあたり、皆さんに理解してもらいたいのが、「世の中就職できた人だらけ」ということである。そんなの当たり前じゃないか、と言うなかれ。総務省の調査によると、2013年の役員を除く雇用者の人数は5240万人もいるのだ。子供や高齢者、専業主婦を除き、これだけ多くの人が見事面接を勝ち上がり、就職できているのである。

いえいえ、非正規労働者も多いですし、一概に「就職できた人だらけ」とは言えないのではないのでしょうか！　なんて労働事情に詳しい専門家あたりから言われそうなので内訳を見てみよう。

5240万人のうち3273万人(62・5%)が正規雇用者で1967万人(37・5%)が非正規雇用者である。昨今、メディアや研究者は「1984年、非正規雇用者は15・3%に過ぎなかった。現在の格差を助長しているのは正規雇用を縮小しているからだ!」といった論調で企業を叩きがちである。

だが、これは割合を見ればそうかもしれないが、労働人口自体は1984年の3936万人から大幅に増えており、正規雇用者の人数自体は3333万人から3273万人に減

った程度である。しかも、総務省の2014年7～9月期の調査によると非正規雇用者に「なぜ非正規を選んだか」と調査した結果、「自分の都合のよい時間に働きたいから」という回答が全体の25・4％で1位に。問題にされがちな、「正規の職員・従業員の仕事がないから」という回答は17・1％に過ぎない。この結果から、東京新聞・中日新聞論説副主幹の長谷川幸洋氏ゆきひろはこう結論づける（『週刊ポスト』2014年12月26日号より）。

非正規雇用者のうち転職希望者は22・9％に過ぎず、そのうち「正規の仕事がないから」非正規に就いていて転職希望となると148万人、全体の7・6％にとどまっている（2014年7～9月期平均）

これらの数字が示しているのは、非正規雇用の大部分は自己都合であり「本当は正規で働きたい」という人は世間が思うほど多くはない、という現実である

別に正規・非正規の是非や格差の実態を問いたいのではない。「人は案外就職できて
いる」という事実を言いたいだけである。

就職活動でなかなか内定が出ない時、自分がいかに無能かと嘆きたくなるだろうがそんなことはない。世の中にどれだけ雇用された者が多いか！ 電車の中でバカ面をしながらスマホゲームに必死のオッサンだって、サークルのバカ先輩であるシノハラさん（仮名）だって、普段パンツ一丁でうろうろ歩いては尻をかいている姿だけが印象的なあなたのお父さんだって就職できたのである。

と考えれば、就職なんかちよつとその気になればできるものであることをまずは認識していただきたい。就活をなめてかかれ、と言いたいのではない。過度にビビるな、聖域化するな、と言いたいのである。

私が就職活動をしていた時、目の前にいる面接官はもう憧れの神様のような人だった。「ははあ、この方は、大大大お日本テレビ様にお入社された優秀なお方なのですね！ ははあ、わ、私めのようなバカにもなんとか内定をいただけませんでしょうか！ 一生ついていきます！ キャー素敵！」みたいな卑屈な感覚で面接を受けていた。

だが、第二章で詳しく書くが、面接の最中、とあるきっかけから、ゴーマンながら途端にこう思ってしまったのだ。

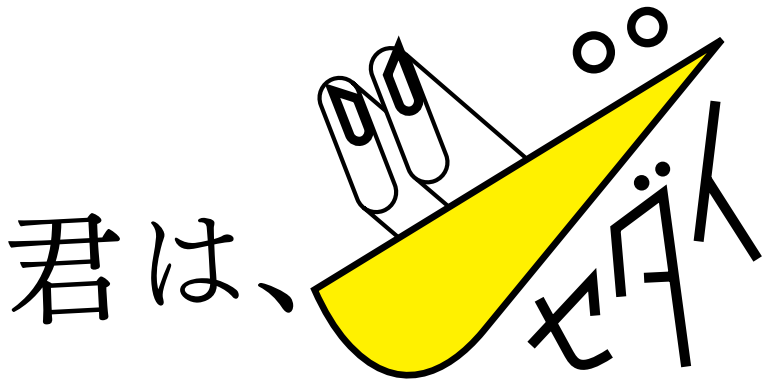
「こいつ、クソするよな」と。

さらにこう思った。

「こいつ、ズボンとパンツを下ろしてマヌケな姿でビビーツとクソしている最中にカギをかけ忘れていて、そこをオレがドアを開けてしまったら、『うわっ!』とか狼狽^{スウハイ}して慌てて前を隠して、『あっ、あっ、あっ、し、閉めてください!』なんて言うんだろうな」と。

一体これが何を意味するのかといえば、別に面接官だからと言って神様でもなんでもないし、自分と同じ人間、そして普段はバカにしがちな自分の父親と同じだということに気付いたのである。「面接官を神格化せず、『同じ人間同士である』という気持ちを抱くようになった」からは面接がうまくいくようになった。

決して面接官を見下すような態度を取ってはいけなものの、過度にビビる必要はない。この姿勢を持つことが重要である。



君は、

何と闘うか？

<http://ji-sedai.jp/>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、
行動機会提案サイトです。読む→考える→行
動する。このサイクルを、困難な時代にあっ
ても前向きに自分の人生を切り開いていこう
とする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ イベント

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月
開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

ニッポンのスタートアップ

3年後に再会することを約束して行う、
未来アポ付きスタートアップインタビュー！

ジセダイジェネレーションズU-25

彼らはどうやって「闘う相手」を見つけたのか。
各界の超新星に、その軌跡と未来を聴く。

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!